

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 5 月 2 日現在

機関番号：14401

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2015～2015

課題番号：15H06353

研究課題名(和文) 名前・命名に関する社会意識と実態の計量的研究

研究課題名(英文) Measuring study of social awareness and reality about name and naming

研究代表者

塚常 健太 (TSUKATSUNE, Kenta)

大阪大学・未来戦略機構・研究員

研究者番号：40756483

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,100,000円

研究成果の概要(和文)：新生児の命名ランキングを共分散構造方程式モデリング(SEM)によって分析し、ランキング変動の内的要因と外的要因、および長期的変動と短期的変動の切り分けを行った。また、インターネット調査を企画し、調査会社に委託した上で、2016年2月に実施した。中心となるのは、名前と命名制度に関する意見や、自身の名前の特徴についての項目である。また、一般的な社会意識や行動についての項目も広く取り入れている。内容の異なる6グループの項目を、それぞれ500人の調査対象者、合計3000サンプルに対して提示した。得られたデータは現在分析中であり、その結果は2016年から2017年にかけて発表される予定となっている。

研究成果の概要(英文)：Ranking data of baby's name was analyzed by Structural Equation Modeling. There were internal and external effects, long-span and short-span fluctuations, in the ranking.

And an internet investigation was planned. Entrusting to investigative committee company, it was conducted in February, 2016. The item about opinion about name and naming system was put in the center. The item about the general social awareness and behavior were also taken in widely. 6 groups of item different in the contents were shown to each 500 investigation object persons, total of 3000 samples. The data is being analyzed at present, and the result is expected to be announced from 2016 to 2017.

研究分野：社会学

キーワード：ソーシャル・テイスト 社会階層 コンジョイント分析 名前 文化資本 命名ランキング 共分散構造方程式モデリング

## 1. 研究開始当初の背景

人名と社会との関係は、人文・社会科学の多様な観点から研究が進められてきた。社会学分野でも P. ブルデュール、E. ゴフマン、A. シュッツ、A. L. ストラウス といった著名な理論家が、おのおのの関心に沿って名前の社会的機能を論じている。さらに欧米では、多数の名前の実証研究も蓄積されてきた。その研究史は着眼点から二系統に大別できる。

(1) 実態として使用された名前を対象とする研究史。最も中心となる対象は新生児の名前の研究である。移民のアイデンティティや人種間の権力関係 (Sue and Telles 2007, Gerhards and Hans 2009)、男女差と性別役割意識 (Rossi 1965)、郊外化や核家族化、マスメディアの発達などマクロな社会変動の影響 (Gerhards and Hackenbroch 2000)、文化資本や教育階層 (Elchardus and Siongers 2010) などが代表的な論点である。

中でもアメリカの S. Lieberman は体系的な名前の社会学的研究を行っており、上記の全ての視点から分析を進め、Lieberman (2000) では集大成として名前の “social taste” 論を展開している。著名なブルデュールの “taste” (趣味) の理論が階級間の闘争と戦略を強調するのに対し、Lieberman の理論ではより大規模で、無意識的な集合行為の結果として人種間・言語文化集団間で異なる変化のパターンが生じる側面が強調されている。Lieberman が実証した具体的な (social) taste としての命名の特徴は、由来する言語文化圏、性別を示す接尾辞の有無、標準的な綴りからの乖離の程度、その名前が過去に流行した時期の古さなどである。

また Lieberman は名前を社会学的に研究する意義として、(一) 原理的に社会の構成員全員が持ち、(二) 経済力の制限を一切受けられないため社会変化を鋭敏に反映しやすく、かつ (三) 実証に耐えうる大規模なデータも利用可能であることをあげている。

(2) 提示された名前に対する他者の反応や意識を対象とした研究史。その中では、J. K. Skipper らによる一連の研究が特に注目値する。複数の名前の一群のみを情報源として調査対象者に提示し、名前の主の所属階級 (social class) を判断してもらおうという比較的単純な方法を用いて、主観的な階級 (階層) と名前との強い相関が明らかになっている。実験的調査と後の追試を踏まえ、Skipper et al. (1990) では、名前の主の他の情報が一切提示されなくとも他者は階級の高い名前を判断するという結論に至っている。

以上の欧米の状況に対し、日本でも社会学の研究事例が存在するものの著しく少ない。(2) に対応する他者の反応の研究は存在せず、(1) に対応する名前の実態の研究も統計量を

示しながら行われた例は金原 (1995)、片瀬 (1993, 2003)、小林大祐 (2000, 2001) に限られる。また、日本全体の動態として代表的な情報源である新生児の命名ランキングも、その内容に言及する文献は「名前が社会を反映する」という自明な主張とともに各年の世相を列挙するものがほとんどである。学術的な計量研究は Ogihara et al. (2015) が端緒といえる状況であり、分析の余地が大きい。

名前・命名行為に関する社会学的研究が日本ではいまだ発展途上にあることから、計量的手法を用いて体系的な研究を行う必要性がある。また、近年激化の傾向にある、子どもの名前に対する論争 (命名論争) の生じる社会的背景を解明する意義も大きい。

以上を踏まえた本研究の課題は、次の二課題である。

(1) 定量的な分析事例の極めて少ない、命名ランキングの変動の時系列的な分析。

(2) コンジョイント分析を用いた、他者の名前に関する人々の反応メカニズムの解明。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、理論面で S. Lieberman の social taste 論に依拠し、計量社会学の立場から、子どもの命名をめぐる論争が生じる背景を明らかにすることである。また、従来手薄であった名前の社会学的研究を推進するだけでなく、広く流行現象と社会階層との関係を扱う研究一般にも寄与する。さらに、命名権や人名用漢字などの法と制度の今後を議論する上での有用な根拠を提示し、社会貢献を果たすことも目的である。

二つの課題それぞれの具体的な目的は、次の通りである。

(1) 数量的な手法を用いて新生児の命名ランキングを分析し、日本社会の命名の実状と動態を把握しつつ、名前に関する人々の主観との整合性 / 乖離も明らかにする。また、ランキングの変動に対する内的 (自動的) 要因と外的要因とを切り分け、内的要因についてはさらに長期的変動と短期的変動との切り分けを行う。

(2) J. K. Skipper の主観的階級 (階層) 判断の研究の方法論を発展させる。研究代表者自身による過去 (2012 年) のインターネット調査の知見を踏まえ、同一または類似の質問項目を異なる条件下で追検証し、階層の高低に結びつく (と他者が判断している) 名前の特徴、および判断結果に対して及ぼされる判断者自身の社会階層の影響を解明し、より頑健で緻密な知見を得る。

### 3. 研究の方法

(1) 明治安田生命の男女別・新生児命名ランキングを研究代表者自身が Excel に入力してデータセットを作成し、これを統計ソフトウェアによって分析した。ランキングは明治安田生命の 100 年間の男女別・上位 10 位までのランキングである(ただし、近年に近づくほどランキング算出の母集団に偏りが生じるため、2005 年以降の順位は Benesse のランキングを採用した)。ランキング変動の外的要因と内部的要因を切り分ける分析手法として、当初はランキングとマクロな社会指標(大学進学率、犯罪発生率など)との関係性を明らかにする時系列分析や、個々の名前の単年度での順位を 1 ケースと見なすパネル分析(マルチレベル分析)を念頭においていた。しかし、研究会での発表と他の研究者による助言を得て、共分散構造方程式モデリング(SEM)による、分析に変更した。

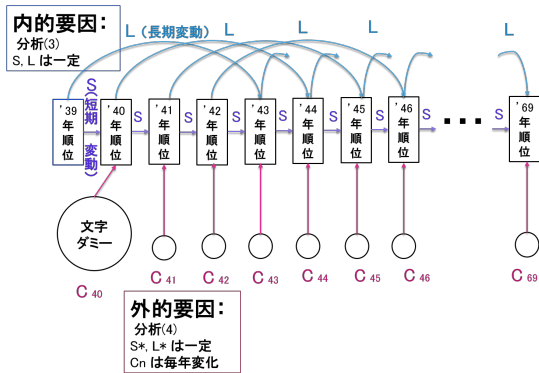


図 1 SEM で分析したモデル(1939 ~ 69 年の例)

100 年間を特定の 30 年間ごとに区分した順位データを使用し、男性名・女性名それぞれで分析を行った(図 1)。ある年の順位を従属変数、その前年(1 年前)の順位を独立変数としたモデルを Mplus(統計ソフトウェア)に読み込ませ、これを 2 年間の短期変動と見なした。さらに、この短期変動に加えて 4 年前の順位を新たな独立変数として追加し、5 年間の長期変動と見なしたモデルを設定した。最後に、以上の内的要因による変動に加え、イレギュラーに発生する外的要因に対応する独立変数として、特定の文字種や語義を持つ名前であるかどうか(例えば、戦勝を祈願する「勝利」「武」といった名前、学問成就を祈願する「智子」「学」といった名前)を示すダミー変数を作成し、投入した。

(2) 研究代表者が 2012 年に実施し、既に学術論文にまとめた、他者による名前の階層判断とコンジョイント分析の手法をさらに発展させ、新たなインターネット調査を実施した。使用する命名パターンを変更することにより、前回の知見の頑健性の程度と新たな結果が把握できるだけでなく、非明示的な質問項目への回答と明示的な項目への回答との比

較検討によって、命名論争の背景事情ともなっている主観と客観の乖離の程度を明確に検証する(分析中)。

質問項目を設計後、楽天リサーチ(株)に委託し、2016 年 2 月に調査を実施した。内容(並び替えの対象である具体的な名前の種類、直行表の内容、質問文など)

表 1 使用した名前の

組み合わせの例

流行時期	性別	難読	推測	男性名	女性名
1	3	3	1	ないと 騎士男	じゅりあ 七月女
2	1	2	3	さかえ 昌	みさお 節
3	3	1	3	るき 瑠希	りおん 理恩
4	1	3	2	たかみね 富士	たえ 細布
5	2	3	3	ひかる 明星	あきら 朝日
6	3	2	2	そうた 奏詩	ひな 陽和
7	2	2	1	かずひこ 知彦	けいこ 結子
8	2	1	2	まこと 誠	めくみ 恵
9	1	1	1	しょうざぶろう 庄三郎	しずこ シズ子

が少しずつ異なる調査項目を計 6 パターン準備し、それぞれについて 500 人ずつ、計 3000 サンプルとした(表 1)。調査対象者は、全てあらかじめ登録してある調査モニターである。また、調査には他者の名前に対して階層を判断する項目以外にも、名前に関する様々な項目を含んでいる。また、その他にも社会一般の政治意識・家族観・福祉観などに関する意識項目や、文化に関する行動項目等も含んでおり、改装判断やその他の名前に関する項目との関係性を検討する。

### 4. 研究成果

(1) 命名ランキングの時系列分析については、短期的変動と長期変動の切り分けを行うことができた。また、それらの内的要因の影響を統制してもなお、外的要因の効果が残ることが分かった。また、命名ランキングの変動のうち、内的要因による変動の大きさは 100 年間を通じて比較的安定しており、男女差は見いだせなかった。従って、時期によって突発的に生じる変動、外的要因による部分であり、ここに男性名と女性名の差異も存在することが分かった。基本的に、命名ランキングの変動の大部分は内的要因で説明されており、Liebersen(2000)が欧米圏(表音文字圏)の名前の研究から築いた理論的モデルに整合して、日本(漢字圏)でも内的変動が大きい。その上で、漢字によって社会状況が直接命名に反映されやすい形になっており、この外的要因の範囲で欧米圏とは異なる様相の変動が生じていることが示唆される。

(2) インターネット調査から得られたデータは現在分析中であり、その成果は 2016 ~ 2017 年の学会発表にて公表する予定である。さらに、その知見は 2017 年度以降学術論文にまとめる予定である。

## 参考文献

- Elchardus, M. & J. Siongers, 2010, "First Names as Collective Identifiers: An Empirical Analysis of the Social Meanings of First Names," *Cultural Sociology*, 5(3): 403–22.
- Gerhards, J. & R. Hackenbroch, 2000, "Trends and Causes of Cultural Modernization: An Empirical Study of First Name," *International Sociology*, 15: 501–31.
- Gerhards, J. & S. Hans, 2009, "From Hasan to Herbert: Name-Giving Patterns of Immigrant Parents between Acculturation and Ethnic Maintenance," *American Journal of Sociology*, 114(4): 1102–28.
- 金原克範, 1995, 『“子”のつく名前の女の子は頭がいい』洋泉社.
- 片瀬一男, 1993, 「娘の名前—文化変容と女性性—」『日本教育社会学会大会発表要旨集録』45: 66–7.
- 片瀬一男, 2003, 『ライフ・イベントの社会学』世界思想社.
- 小林大祐, 2000, 「消費社会の記号化過程について—名前における変化から—」『経済社会学会年報』22: 64–72.
- 片瀬一男, 2001, 「名前の社会的分析に向けて—漢字がつくる同一性のなかの差異—」『評論・社会科学』65: 23–41.
- Lieberson S., 2000, *A Matter of Taste: How Names, Fashion, and Culture Change*, New Haven, Connecticut: Yale University Press.
- Ogihara, Y., H. Fujita, H. Tominaga, S. Ishigaki, T. Kashimoto, A. Takahashi, K. Toyohara, & Y. Uchida, 2015, "Are Common Names Becoming Less Common? The Rise in Uniqueness and Individualism in Japan," *Frontiers in Psychology*, 6: 1–14.
- Rossi, A. S., 1965, "Naming Children in Middle-Class Families," *American Sociological Review*, 30(4): 499–513.
- Skipper, J. K., P. Leslie, & B. S. Wilson, 1990, "A Technique Revisited: Family Names, Nicknames, and Social Class," *Teaching Sociology*, 18(2): 209–13.
- Sue, C. & E. E. Telles, 2007, "Assimilation and Gender in Naming," *American Journal of Sociology*, 112(5): 1383–45.
- 塚常健太, 2015, 「名前に対する階層判断とソーシャル・テイスト—コンジョイント分析による推計—」『ソシオロジ』183.

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 1 件)

塚常健太, 2015, 「名前に反映される世相とは何か 命名ランキングの動態に関する基礎的分析」第 60 回数理社会学会, 於大阪経済大学, 2015 年 8 月 29 日.

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
出願年月日:  
国内外の別:

取得状況(計 0 件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
取得年月日:  
国内外の別:

〔その他〕

中日新聞記事「「健太」がいっぱいなぜ？」(2016 年 1 月 10 日)について、名前の流行現象に関するコメント.

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

塚常健太(大阪大学・未来戦略機構・特任研究員)  
研究者番号: 40756483

### (2) 研究分担者

( )  
研究者番号:

### (3) 連携研究者

( )  
研究者番号: